

随想(二) 比翼忌に憶う

高司 良恵

(会員・佐伯市宇山区)

四月二十九日。宇山城趾は新緑に包まれ心地よい風が頬を撫でていく。

今日は、「宇山城趾。比翼塚。保存の会」主催第一回比翼忌である。準備万端整った会場には、しきりに鶯の鳴く声が聞こえてくる。

十時過ぎ式典が始まり、佐伯市長佐々木博生氏、南郷村教育長中邑氏、御来賓の方、安藤家より裕氏御夫妻、御子息をはじめ、堅田踊りが伝わる宮崎県の南郷村と延岡市の保存会の方々六十五人、地元民多数が出席、往時を偲びつつ鎮魂の式を終わった。引き続き四地区の供養踊りが次々に披露され交流の輪を深めた。

淵に身を投げ刃で果つる…の音頭で始まる堅田踊りは「長音頭」とも呼ばれている。

今から、二百四十五年前、寛延二年(一七四九年)宇山の医師、安藤家十三代元柳の長男「丹蔵」二十一才と、

同じ堅田川の流れを汲む柏江の在所、山伏「龍正院」の次女娘「お民」十七才が、叶わぬ悲恋に泣いて情死を遂げたのが五月十日の早暁である。

いま鳴る鐘は江国寺……五ヶ寺の鐘も皆鳴りて 白らむ東の横雲に……

さて、この情死のヒーローである半蔵と、お民の出会い。当時、堅田郷は天領であった。その物産の積出し港としてにぎわった柏江の祭り「竜王神社」の初縁日、正月二十八日が運命の舞台となっている。

登る半蔵に下向するお為 一の鳥居の左の側で ふつと半蔵はお為に出合い 積る思いに人目も避けず……

男女の相愛は、いつの時代も変わりはないが、当時の世相、時代背景によってその愛の在り方も、考え方も、身の振り方も大きく左右される。まして、封建制度、身分制度の厳しかった時代の「お民と半蔵」ただひたすらに思いを寄せる半蔵。どうにもならないお民の運命き運め。

「お為半蔵」口説に切々と謳われ、その流麗な美文は、読む人、聞く人の心をゆさぶる素晴らしい文学的価値の高い作品となって、おのずから恍惚境に引き込まれる。

この「お為半蔵」の音頭は、豊後、豊前は勿論のこと、日向、又海を渡って伊予、土佐、阿波、長崎、島根、関西方面、あるいは全国的に、この音頭が伝承されている。この「お為半蔵」の音頭の作者は誰だろうか？。大坂の人といわれ情死直後たった二週間余で書き上げたというが、その作者はわからない。

だが、この音頭はどことなく「曾根崎心中」の匂いがある。或はその系統の文人が書いたのではないかと推測される。



哀愁こもる名調子のこの音頭は、幾世代も越えて現在に息づいている。踊る人、口説く人、三味太鼓のお囃子、

輪を囲んで見物する人、老も若きも夜を徹して酔いしれたあの頃が、そぞろなつかしく思い出されてくる。

心中、情死について現代的感覚から、考えてみればどうだろうか。マスコミのニュースとして取り沙汰され「噂も七十五日」として消え去っていく時代である。そして、それ以上に人道はずれのむごい出来事が、次から次へとせきを切った様に起こり尊い生命が、葬られていく恐怖とも思われる世の中である。

昨年「宇山城趾。比翼塚。保存の会」が、発足し先人の残してくれた数々の歴史的文化的遺産を始め、四季折々の諸行事を継承していく中で、特にこの「堅田踊り」お為半蔵の発祥の里「宇山」で添い得なかつた若き二人の供養が地区民の熱いおもいで甦ったことは、感無量の思いでいっぱいである。

又、これらの行事を通して、地域住民の連帯と和、地域の活性化、他地区との文化交流による高ぶりは、たしかなものとして肌身感じられる。

これからは、地道な末永い活動を通して地域に根づいた香り高い文化として、この「堅田踊り」の灯をもちやし続け後世に伝承したいものと念じて止まない。

宇山城趾のふもと小高い丘安藤家の墓地の中に「釈良節往生位」「法喜妙悦禪定尼」と並んで刻まれ左側面に、寛延二年五月十一日と風化され苔むした墓石の文字を確認することができる。

合掌

「お為半蔵口説」一部引用

堅田踊り

「お為 半蔵」 口説

淵に身を投げ刃で果つる

心中情死は世に多けれど

鉄砲腹とは剛気な最後

どこの事かと尋ねて聞けば

ころは寛延二年の頃で

国は豊州海部の郡

佐伯領とや堅田の谷よ

堅田谷でも鶴山は名所

名所ならこそお医者もござれ

お医者その名は玄了様と

これは此の家の油火の

明るあんどもまたたく風に

消える思いは玄了さまよ

一人息子に半蔵と云うて

幼なだちから伶俐な生れ

家の伝えの医者仕習うて

匙もよう効きみたてもあたる

堅田もとより御城下迄も

はやる病は半蔵にかかる

半蔵は長袖常にもしゃれて

襟を着飾り小褌をそろえ

足にや白足袋八ツ緒の雪駄

しゃならしゃならで浮世を渡る

やつす姿は人目に立て

道の往来にや皆立止り

彼は好いもの好い若いもの

在にや稀じやと皆費て行く

賞る言葉がつい仇となる

同じ流れの川下村で

潮の満ち干を見る柏江の

渡上りに修験がござる

修験その名は流正院

流正院とぞ呼ぶ山伏の

妹娘にお為と云うて

とつて十八角前髪の

花もはじろうきれいな生れ

諸芸縫い針読書までも

あたり界限誰たてつかぬ

地下に一人の評判娘

それに半蔵が想いをかけて

何時かどうぞと恋路の願い

胸に焚く火の燃れはすれど

人目のある世は儘にもならず

真間の継橋渡りは絶えて

磯の石決明のただ片想い

思い兼ねたる心の祈念

どうぞ助けて逢せてたまえ

逢て思いを遂げさすならば

一生断ちましょ鰻と玉子……

中略

短い夏の夜は更けて

今鳴る鐘は江国寺

また鳴る鐘は常楽寺

また鳴る鐘は真正寺

また鳴る鐘は天徳寺

また鳴る鐘は正明寺

正明寺こそ正七つ

五か寺の鐘も皆鳴りて

白らむ東の横雲に

夜明鶉が最後をせがむ

死なにや追手のかかろも知れぬ

早く殺して殺してと

言うに半蔵も覚悟をさわめ

二尺一寸すらりと抜いて

花のお為を只一うちに

倒おる死屍腰うちかけて

かねて用意の銃とりなおし

どんと放つが此世の訣れ

残るあわれは堅田の谷よ

今もとどむる比翼塚

お為半蔵心中のうわさ

聞くも涙の一しづく